古代壁画研究40年

大学院人文学研究科教授
百橋　明穂

文化・歴史に関して、最近なにかと話題になっていることは「世界遺産」であろう。人間の長い歴史的営みの中で形成された造形芸術は、一方で人間の長きにわたる継承の中に保持・伝授されてきた。美術史学研究もこれらと深い関わりがある。現在大学院人文学研究科には連携講座として「文化資源論」があり、奈良国立博物館や大和文華館との連携によって現場での研究・教育に充実と発展を期している。

今明日香村の高松塚やキトラ古墳壁画の保存と活用が国民的関心事となり、連日の如く新聞紙上に記事が載る。私も文化庁の対策委員会委員の一人として、意見を述べるざるを得ないことも多い。美術史学研究者として、さらに云えば壁画研究者の一人として、壁画に関しての見解が期待されているのであろう。しかし私が壁画研究を目指したのははるか37年前に遡る。美術史学の大学院生として佛教美術の源流を求めて、中国は西の果て敦煌石窟の壁画研究を目指したのである。勿論云うまでもないが、その頃には高松塚もキトラも未だ発見されていなかったし、その当時は未だ日本と中華人民共和国とは国交がなかった。文化大革命の最中であった。到底中国へ行くことも夢の様な時代であった。そのため、研究資料もほとんどなかった。1900年代初めのイギリスのスタインやフランスのペリオ、日本の大谷探検隊の撮影した古くさい写真のみが手懸かりであった。敦煌は20世紀初めに欧米列強が派遣した中央アジア探検の目的地の一つであった。しかもその五百あまりある石窟の一つから有名な敦煌文書が大量に発見され、また同時に発見された絵画遺品と共に、欧米や日本にもたらされた。すなわち歴史学や仏教学、そして美術史学などを巻き込んだ敦煌研究が始まって百年以上が経過していることになる。神田喜一郎先生に『敦煌学五十年』という本があるが、今はまさに敦煌学百年である。先般敦煌研究における美術史学百年の軌跡をまとめた。戦前の研究者は誰一人敦煌には行っていない。そのため、到底現場である敦煌の地を踏むことはないであろうという前提のもとでの研究は、かえって地道な実証的な考証と想像力を働かせるいい機会でもあった。佛教美術の基本である佛教説話画の研究を修士論文としてまとめ、美術史学会で発表し、学会誌に掲載された。勿論一度も現物を見ずにである。しかし後で分った話であるが、この論文は敦煌にある敦煌文物研究所（今は敦煌研究院）で注目され、執筆者には断り無く中国語に翻訳されて回覧されていた。

事態が一変したのは1972年の日中国交正常化である。奇しくも同じ年に高松塚古墳壁画が発見されている。やがて満を持しての敦煌石窟見学の日はやってきた。その当時の中国の交通事情は悲惨なもので、甘粛省の西端にある敦煌へは行っても行っても草木一本ない砂漠地帯をひたすら西方を目指した。玄奘三蔵もかくやらんと思われた。今では関空を朝発てば、その日にでも敦煌空港にたどり着くとことができる。それから三十数年、中国の経済発展によって中国各地で膨大な量の遺跡の発掘が行われ、いままで全く知ることの無かった様々な時代の遺跡や遺物が発見された。なかでも注目されたのは壁画墓であった。はじめは隋唐代の陵墓壁画であったが、それより古い魏晋南北朝時代、さらには漢代の壁画墓も大量に発掘されている。またその頃から敦煌や甘粛省などから多くの留学生が来日し、彼らのもたらす研究情報は貴重この上ないものであった。さらに敦煌での国際シンポジウムでは何度も研究発表を行い、また壁画を調査することができた。やがて甘粛省各地の佛教石窟や、西安周辺の唐代陵墓壁画の調査を実施した。現在科学研究費を頂いてその壁画資料データベースを作成中である。毎年作例が増加しており、最終的な完成はあり得ない。しかし今のところ日中を問わず、最も最新のしかも、一番数多くの作例を集積していることは間違いない。さらに二つめの壁画古墳キトラの本格的な調査が始まり、参加を要請され、その壁画の解析と保存にあたった。高松塚壁画とは大いに異なる内容の壁画であることが驚愕の事実として注目された。同じ四神図でも両者には本質的な相違があり、また一方にある男女群像は他方にはなく、十二支像は一方にない。その解釈をめぐって大いに議論を展開した。両壁画墓の被葬者に関する議論や築造の前後関係などの議論が進行している。それには中国の壁画墓の豊富な作例に関する知見がものをいった。しかしその間高松塚壁画が発見されてから30年が経過し、この間の保存が大問題となった。両墓とも築造されてからほぼ1300年が経ち、その間は何とか人知れず無事だったものが、何故たった30年でかびや劣化といった保存対策の不具合が生じたのか、保存科学と文化財行政との狭間で解決に窮したといってよい。中国に限らず、フランスでもイタリアでも壁画保存という課題は極めて困難な課題である。極論すれば成功した例はないといってよい。人類のかけがえのない文化・歴史遺産である壁画芸術を保存し、後世に伝えることは喫緊の課題であり、また永遠の課題でもある。壁画研究を目指したからすでに40年近くが過ぎ、人文学研究の悠久な歩みと地道な研究成果が評価されたといえる。

壁画シンポジウムで敦煌研究院樊錦詩院長と司会
（2007年8月、中国・敦煌で）